

## エゼキエル書6章8－10節 「主を思い出す民」

### 1A 逃れる民 8

### 2A 打ち砕かれた主の心 9

#### 1B 偶像を慕う姦淫の心

#### 2B 自ら厭う悪

### 2A 主を知る民 10

#### 1B 神中心の信仰

#### 2B 理由の中での災い

## 本文

エゼキエル書 6 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、先週で 3 章まで来ました。午後に 4 章から 7 章を見ていきます。今朝は、6 章 8-10 節に注目します。「8 しかし、わたしは、あなたがたのある者を残しておく。わたしがあなたがたを国々に追い散らすとき、剣をのがれた者たちを諸国の民の中におらせる。9 あなたがたのうちののがれた者たちは、とりこになって行く国々で、わたしを思い出そう。それは、わたしから離れる彼らの姦淫の心と、偶像を慕う彼らの姦淫の目をわたしが打ち砕くからだ。彼らが自分たちのあらゆる忌みきらうべきことをしたその悪をみずからいとうようになるとき、10 彼らは、わたしが主であること、また、わたしがゆえもなくこのわざわいを彼らに下すと言ったのではないことを知ろう。」

私たちは前回、エゼキエルが主に召されて、「反逆の国民」にあなたを遣わすと命じられたところを読みました。私たちにとって、最も心を痛めるのは「応答がない」ということでしょうか、神にとっても同じです。愛しているからこそ、語るべきことがある。そして行ないによっても、愛を示していく。しかし、さっぱり反応がない。まるで、語っている自分、行なっている自分が存在しないかのようにあしらわれる。なんか、行なっている、話していると思っているかもしれないけれども、その内容を聞いているとは到底思えない、ということがありますね。そのことをエゼキエルは経験していました。

私たちがアメリカから日本に引っ越したのが 1997 年ですが、すぐに伝道活動を始めました。そして、英語関係に興味を持ってくれた女の子が近所でした。間もなくアメリカに留学するから、英語を学びたいと思っていました。その学校が、音楽学校です。そしてジャンルはジャズだそうです。それでこんなことを、言っていました。「日本人は、ジャズがバックミュージックで流れていることにはとても好意的だけれども、その中身に対しては無関心だ。」そうですね、雰囲気としてジャズを楽しんでいるけれども、その受容はとても表面的で、本当のメッセージから心は程遠いということがあります。

これと同じことが、霊的にも言えますね。キリスト教についての話は、とても良いものだとまりま

す。けれども、その中身を心で受け入れるというところまでにはなっていない状態です。興味をもって聞いているのですが、自分の生活を変えるところまでには行きません。33章 20-32節に主がエゼキエルにイスラエルの民のことを次のように言っておられます。「人の子よ。あなたの民の者たちは城壁のそばや、家々の入口で、あなたについて互いに語り合っとう言っている。『さあ、どんなことばが主から出るか聞きに行こう。』彼らは群れをなしてあなたのもとに来、わたしの民はあなたの前にすわり、あなたのことばを聞く。しかし、それを実行しようとはしない。彼らは、口では恋をする者であるが、彼らの心は利得を追っている。あなたは彼らにとっては、音楽に合わせて美しく歌われる恋の歌のようだ。彼らはあなたのことばを聞くが、それを実行しようとはしない。」まさに、「聞いていて、気持ちよい。」という、ジャズをレストランで聞くような気持ちで聞いているだけだ、ということです。実行することは、あまり真剣に考えていません。

合同修養会で、カルバリー西東京の芳也さんが朝のデポーションで彼の体験を分かち合ってくれました。クーポンがあったので、肩こりを直すために安い料金でやってくれる整体に行ったそうです。肩こりということのはずでしたが、まったくマッサージはなかったとのこと。腕の付け根をものすごい圧力で押されて激痛だったり、両肩を強く広げられたりされました。結局、肩こりをなくしてくれるマッサージはしてくれなかったとのこと。けれども、肩がこるのは、もちろんその猫背のせいなんですね。それで、御言葉を聞くことと兼ね合わせていました。私たちはしばしば、マッサージを求めて御言葉を聞きます。自分が聞いた時に、その時に気持ちよくなれる、「よく聖書が分かりました、良かったです。感動しました。」そんなメッセージを求めている。しかし、神は整体を行われるようなメッセージです。その根本を直そうとするので、大抵、自分の願っているような言葉ではない、ということです。<sup>1</sup>

## 1A 逃れる民 8

そこで主は、手を変え、品を変えて、エゼキエルを通して民に、今の状況に目を向けてくれるように、熱心に語っておられます。初めは、言葉で語っても注意も引かないであることを知っておられたので、無言のジェスチャーで、エルサレムがバビロンによって包囲されて滅びることを、エゼキエルにやらせました。全く関心を寄せない状態の時に、彼が奇抜な行動に出ることによって、人々を驚かせる形で言葉を語ろうとされたのです。それが、4章と5章に書いてあります。そして6章から言葉によるメッセージを始めました。

もう一度、8節を読みます。「しかし、わたしは、あなたがたのある者を残しておく。わたしがあなたがたを国々に追い散らすとき、剣をのがれた者たちを諸国の民の中におらせる。」エルサレムを主は破壊されます。僅かに、その剣を逃れてバビロンに捕え移されるものを残されます。その残された者たちが、主を思い出すようになります。私たちは、与えられている祝福があるからこそ、主を忘れることがあります。「エペソ 1:3 神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって

<sup>1</sup> <http://www.calvarywesttokyo.com/archives/8225>

私たちを祝福してくださいました。」とパウロは言いました。靈的祝福が既に、キリストにあつて私たちに注がれています。そのことを御靈によって、思い出すこと。それがまさに私たちが、熱心に求めて、していかなければいけないことです。ちょうどそれは、イスラエルの民が約束の地に入る時に、主が彼らに警告された時と同じであります。「申命 8:11-14a 気をつけなさい。私が、きょう、あなたに命じる主の命令と、主の定めと、主のおきてとを守らず、あなたの神、主を忘れることがないように。あなたが食べて満ち足り、りっぱな家を建てて住み、あなたの牛や羊の群れがふえ、金銀が増し、あなたの所有物がみな増し加わり、あなたの心が高ぶり、あなたの神、主を忘れる、そういうことがないように。」主が、乳と蜜の流れる地に入れると約束されました。そして、主による偉大な国民にすると約束されました。けれども、その祝福があるがゆえに、かえって心が高ぶり、主を忘れるということがないように、と前もって戒めておられました。そして、エジプトまたその荒野において、どれだけ苛酷な生活であったかを思い出させています。

しかし、彼らは主を忘れてしまいました。もちろん、知識から記憶から忘れた、ということではありません。相変わらず、神殿礼拝は続いていたのです。けれども、日々の生活の中で主を敬うことは何であるのかを忘れていた、ということでもあります。そこで、彼らとその祝福があるがゆえに、かえって主ご自身を忘れていたので、祝福を取り除けた状態、呪いを与えられます。それが、エルサレムから彼らを引き抜くことでした。そして、諸国の民の間で住むことによって、初めて自分たちにとって主がいかに救いとなっていたかを知ることができたのです。そのために、主は剣を免れる、捕囚の民を残しておられました。これは、私たちの心の中の戦いですね。世を愛する愛として、ヨハネは第一の手紙で、目の欲、肉の欲、そして暮らし向きの自慢とあります。自分の頼っているものが、沢山あります。いや、それを喜び楽しんでよいのです、主から来ている恵みであることを知り、絶えず思い出す必要があるのです。その作業が、礼拝であります。自分がいかに、神の恵みの中にいるのか知ること、思い出すことは、実はぼーっとしていたらできないことです。これこそ、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主を愛するのと同じように、全力でやることです。

## 2A 打ち砕かれた主の心 9

そして 9 節に、こうあります。「あなたがたのうちののがれた者たちは、とりこになって行く国々で、わたしを思い出そう。それは、わたしから離れる彼らの姦淫の心と、偶像を慕う彼らの姦淫の目をわたしが打ち砕くからだ。」この訳ですが、興味深いことに、英語と日本語では正反対になっています。打ち砕いているのが日本語では、主ご自身になっていますが、英語では打ち砕かれているように訳されています。つまり、彼らが偶像を慕う姦淫の心によって、主ご自身が砕かれている。傷ついている、ということです。

エレミヤ書でも学びました、主と人との愛の關係の不思議と皮肉がここにあります。主は人を愛するがゆえに、その人の選択を重んじられます。その人を強いることができないのです。愛というものは、そういうものです。その人が心を尽くして、思いを尽くして、自分の選ぶことについて責任を持つようにさせるのが、愛の本質であります。ところが人は、その自由意志をむしろ神ではない

ものを選び取るために使います。「神が、私に強いることがないので、私は自由だから、だから私は自分の道を選びます。」となります。そして罪や欲望の虜となっているのです。自分が主体的な存在、大人のように人格をもって私たちが造られていること。霊的に大人の関係として、神が渡したちとお付き合いしたいこと。鞭打たれないと動かないような、強制力を働かせる関係ではなく、自ら選び取る、その愛の関係でいたいと願われています。

しかし人は主から離れることを選ぶのです。そこで、人は自分が選べたのであるから、神はそれほど深刻に考えていないと思うのです。それで、どんどん自分の思うまま、願うままに事を進めていきます。それがここに書いてある「わたしから離れる」ということです。しかし、愛というのは傷を受けるのです。預言者エレミヤを通して、私たちは主がどれほどユダの民を愛し、ゆえに彼らが離れていくことについて涙を流しておられたのか、傷ついていたのかを教えられました。エゼキエルでもそうです。5章13節に、「主であるわたしが熱心に語った」と書いてあります。熱心という言葉は、妬みとも訳されます。主の愛は、一途であります。しつこいものです。離れていくものを見て、苦しみ悶え、泣き叫び、どうすれば戻ってくるのかを必死になって考えているような姿であります。

#### 1B 偶像を慕う姦淫の心

ここに、「姦淫の心と、偶像を慕う彼らの姦淫の目」とありますね。神は唯一の方であり、神が私たちが愛するという時は、それは一対一の関係です。夫と妻の関係と同じように、複数の関係はありえません。ですから、私たちは全てのことにおいて、神を第一としていかないといけませんね。ところが、いろいろと自分の前にしたいこと、やりたいことがあります。それは、自分が神の恵みによって救われた、ということをおぼえてしまうからです。イスラエルがエジプトの生活でどうであったのか、荒野の生活がどれほど苛酷であったのかをおぼえてしまうからです。ですから、今ある生活が当たり前であると見なして、それで自分で何かしたいことをしはじめます。それがそのまま、偶像であります。神の前に他の神々を自分の目に置くことです。

これは、必ずしもそれ自体が悪いものではありません。いや、それ自体が悪いものであれば、私たちはそれが悪いものだとおぼえて、キリスト者であれば必死に取り除こうとします。けれども、良いものであるからこそ、それが神からの賜物であるからこそ、それを偶像化してしまうのです。私たちは悪魔によって惑わされます。「これをしなければいけない、あれをしなければいけない。」として、いろいろなことを自分に課して、それをやり遂げる責任を持ちます。そうしているうちに、「だれのために、何のためにそれをしているのか」が、分からなくなってしまうのです。

そして、それ自体は良いものなので、厄介になります。イスラエルにとっても、約束の地にある祝福、その作物は神の恵みでした。しかし、神を認めないので、その恵み自体を神としていきます。カナン人にとって、バアルは農耕の神であり、全てのことにおける神でした。そしてアシュタロテは豊穡の女神です。農耕における知恵や力も、また豊かさも、主の与えられるものですが、主の恵みを忘れるので、自分でやっていきたいと願うので、そうした神々を拝み始めるのです。つまり、神

は賜物を豊かに与えられますが、賜物自体に浮気するのです。しかし、それ自体は悪いものではないですから、自分で自分を誤魔化すことができます。旦那さんであれば、「仕事は大切なのだ」ということができます。奥さんであれば、「子育ては大切なもの」であるといえます。けれども仕事も偶像になるし、子育ても偶像になります。

神のことを考えてみましょう。主は、「打ち砕かれる」と言われました。それは、彼らの心を打ち砕くという解釈もありますが、神ご自身が打ち砕かれる、傷つく、ということも真なりです。そうでしょう、自分の奥さん、あるいは旦那さんが、時々には家に戻ってきますが、とっかえひきかえ、他の男性あるいは女性と付き合っています。こちらは、渾身の思いで愛を示しているのですが、むしろその愛に甘え、いつまでもいつまでも、違う男や女のところに行きます。これは大変つらいことですが、私たちの心は、自分のことをいろいろやっていたら、それは神の心を同じようにして悲しませているのです。

自分の愛がいま、どこにあるかを点検してみましょう。果たして、キリスト者、キリストにつながれた者であるならば、七日間、24時間、その様子を監視カメラがあつて、あるいは、一日密着取材があつて、それでキリストにつながれている者としての特徴があるでしょうか？それとも、「あれっ、この人、キリストの名は語っているけれども、何か違うことのほうで精一杯みたいね。」と言われるか？イエス様は、ペテロに、「あなたは、わたしを愛していますか？」と尋ねられました(ヨハネ 21章)。

## 2B 自ら厭う悪

そして、「**彼らが自分たちのあらゆる忌みきらうべきことをしたその悪をみずからいとうようになる**とき」とあります。これは、大事ですね。これまで主によって悪が示されていましたが、それと自分自身が悪を悪として忌み嫌うのは、違います。どんなに神がこれが悪であると言われても、自分で悟らなければ、そこから離れようと思いません。

そこで、私たちは自己点検が必要になります。先ほどの、マッサージの話に戻りますが、私たちが何年も、教会に通い、そして説教を聞きます。しかし、自分には乗り越えたい罪の問題や肉の問題があります。その時、肉で歩んでしまっていると感じているそれをよく観察して、その歩いている場所、歩き方、こうした癖、習慣をしっかりと正直に見てみないと、御霊に導かれるということ自体も分からなくなります。私たちが教会に長いこと通い、そして、説教も多く聞くとします。けれども、その時だけの励ましのメッセージを聞いているだけであれば、10年経っても、おそらく同じことを行なっていることでしょう。パウロは、「ガラテヤ 5:25 もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」と言いましたが、御霊に歩むためには、自分がどの部分で肉で歩んでしまっているのか、神の愛ではなく、他のものを愛してしまっているのかが分からないのです。

## 2A 主を知る民 10

そして 10 節です。「10 彼らは、わたしが主であること、また、わたしがゆえもなくこのわざわいを彼らに下すと言ったのではないことを知ろう。」

### 1B 神中心の信仰

「彼らは、わたしが主であること」を知るという言い回しですが、これがエゼキエル書で最も頻繁に出てくる言葉です。エゼキエルは、初めにケルビムの上の主ご自身、その御座の幻を見ました。神の栄光から見ました。ところが、エルサレムやユダヤ人の間では、神ではなく、自分たちの栄光に満ちていました。自分たちが中心で、自分たちの目的のために全てを行なっていました。神でさえが、神のための自分ではなく、自分たちのための神に成り下がっていました。偶像礼拝です。そこで、主は、「わたしが、このことによって主であることをあなたがたは知るようになる」と言われます。彼ら中心ではなく、神が神である、神が主権者であることを彼らに示されるのです。それが、裁きであろうとも、そのことによって、神がおられること、神が神であることを示されるのです。

私たちの生活が、自分中心ではなく、神中心になるために、神は生活に介入されます。それが時には、不快であったり、痛々しいこともあるでしょう。しかし、その入れ替えが起こった時に、私たちは真実な礼拝者となれます。魂が神の安息の中に入ることができます。

### 2B 理由の中での災い

そして最後に、「わたしがゆえもなくこのわざわいを彼らに下すと言ったのではないことを知ろう」とあります。ゆえもなく、という言葉が大事です。彼らは、これまで自分たちのやってきたことと、そして今、自分たちに回りや自分の身に起こっていることとを関連づけることができませんでした。ただ災難が襲ってきたとしか思えませんでした。それだけ、彼らは見えなくなっていました。それは当たり前です。自分の旦那ではない男を追い求めている女が、今、自分の身に何が起こっているのか、多くのものを失ってしまっていることに気づかず、気づいた時には、惨めになっていたというのと同じです。夢中である時は、自分が自分で何をしているのか分かりません。

その時に私たちは、調子が悪くなると、祈ります。「これこれを、主よ、取り除いてください。」と。けれども、主の御心はその表面的なことではなく、もっともっと、心奥深く、自分とご自身との関わりの点検をするために、そのことを起こして下さっているのです。私たちは、自分の心の中にある偶像が何かを聖霊によって点検してもらいましょう。主に照らしていただきましょう。「詩篇 139:23-24 神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」